伊藤痴遊全集

第十八卷

昭和五年八月十七日印刷
昭和五年八月二十日發行

伊藤痴遊全集　第十八卷

（非賣品）

著者　伊藤仁太郎
發行者　下中彌三郎　東京市麹町區下六番町一〇
印刷者　濤川薫　東京市麹町區下六番町一〇

發行所　東京市麹町區下六番町一〇　株式會社　平凡社
振替東京二九六三九番
電話九段三三一六六四七五四番

（第十七回配本）

共同印刷株式會社印行
村田文泉閣製本

第十八卷　西郷南洲終篇　目次

西郷南洲（終篇）……一
突圍戰の成功……三
乃木隊の苦戰……三七
川尻方面の戰鬪……五一
俠勇桐野利秋……五四
薩軍幹部の苦心……一〇一
田原坂の激鬪……一二三
西郷應援の諸傑……一三四
土佐派の陰謀……一七三

木戸孝允

長井村の突圍戰……二三七
城山の終焉……二五二
卷末に題す……二八四

木戸孝允（終篇）……一

條約改正の着手……三
外債募集と森有禮……三〇
路銀の詐取……四四
中井弘……五四
感情の衝突……六四
大久保木戸の軋轢……七四
樺太境界問題……九七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

征韓論の由來……一一六
所謂征韓論の閣議……一二九
征韓論の結末……一四五
征韓論と岩倉の遭難……一六一
征臺論と木戸……一七一
國會運動の起因……一七九
大阪會議前後の木戸……一九五
その終焉……二一三

西鄉南洲

（終篇）

突圍戰の成功

一

敵を侮るものは必ず破る、と兵法にある。

薩軍は、只一氣に、熊本城を、攻め落す意であつたが、彌、攻め掛つて見る、と、流石に難攻不落の稱ある、名城だけに、其一角をすら、破る事が能ず、荏苒、日を送るのであつた　彼是する中に、官軍の本隊が、海陸共に進んで、薩軍の背面、若しくは側面から、攻め掛つて來た。

於是、薩軍は、城攻にのみ、掛つて居る事が出來ず、大部分は、官軍の本隊に向つて、戰線を張る、必要に迫られたので、自然、城の方は、城兵に、牽制を加へて、其進出を拒む外なく、更に進んで、力攻に攻め落す、といふが如き事は全く能なくなつた。

戰爭の狀況が、斯ういふ事情になつて、薩軍の力は、二つに劃かれるばかりでなく、其の戰線が、延長て來た丈け、それ丈けに、澤山の兵を、要する理由だ。雖然、薩軍の兵數には、限りがある。强て徵發して來ても、直に兵士として、役に立つものでもなく、又、然ういふ兵士は、却つて害が多く、利の少ないものであるから、無理な徵發を、差控へるやうになり、城を圍んで居る兵士を、他の戰線へ、向ける外なかつた。

苦し紛れの窮策から、水攻めの策を取らう、といふ事になつた。熊本城の東の方は、白川と坪井川と、二ツの流れ

があつて、西の方には、井芹川が、通つて居る。三川の流れを瀨切れば、城に向つて、水が氾濫して行くから、此の方面の兵士は、他の方面へ、向ける事が出來る、といふ、理合になる。

乃で、水を瀨切つて、城を攻める、計畫に掛つた。

兒玉參謀は、或日、天主臺のあつた、高臺に上つて、薩軍の形勢を、見て居ると、不思議な事には、井芹、坪井、白川、三川の水が、段々と、增水して來るから、扨は、包圍軍は、窮する餘りに、惡戲を初めたのだな、と、早くも察して、谷司令官の前へ、出て來た。

『閣下、面白い事が、始まりますぞ』

『面白い、とは、そりや、何ぢやい』

『水攻です』

『エツ、水攻……』

『古風な水攻を、賊軍は、計畫して居るです』

『フ、ン、此の城を、水攻に爲る、といふのかい』

『左樣です』

谷も思はず、笑ひを洩らした。

『誰の考へか知らぬが、餘程、苦しく成つたに違ひないぞ。然し怎うぢやらう。其の水攻といふことが、賊軍も、見込みのない事は爲まいが、君の見る所では、何の位の程度まで、やられると思ふか』

『其の點に就ては、御心配はありますまい。小官は、水攻に依つて、籠城の苦痛も、暫時で免かれる事と思ふです』

『そりや、どういふ見込かね』

『今時になつて、水攻を計畫するやうでは、小官の想像が當るでせう。夫は他でもないですが、城を包圍する、兵力

の減少した、結果と見るのが、適當だらうと思ひます。少くも、水攻に依つて、此の熊本城が、落ぬ位の事は、賊軍といへども、必ず知つて居るに違ひない。只水の力を借りて、其の方面の、兵力を減少して、其の減少した、兵力を、他の方面に向ける、といふ、窮策から、出て來た、水攻であらう、と思ふのです　之れは、我軍の本隊が、賊軍の腹背を衝いて、間近までに、進んで來た、といふ、想像が出來ます』

『成程、こりや、君の見樣は、確に當つて居る、夫に違ひなからう。併し、多少の浸水は有らうから、夫だけの準備はしたが、宜からう』

『小官の見込みでは、城内にまでは、浸水せぬと思ひますが、併し、萬一の場合がありますから、夫だけの警告は、仕て置きませう』

於是、兒玉參謀から、夫々の向へ對して、充分の注意を、與へて置く事になつた。

併し、斯ういふ考へから、水攻を見て居るから、城内の兵士は、此の水攻を、左迄に、苦勞にはして居なかつた。

二

兵士に、元氣は有るが、糧食の缺乏を、如何ともする事が出來ない。智謀に富んだ、將校にも乏しくはないが、彈藥の缺乏が、自然に發生て來る、病人の防ぎは、何うする事も出來ぬ。此の二つには頗る苦しんだ。

敵は、然う激しく、攻め掛つて來ないし、城兵も、別に討つて出る、といふ必要もないから、殆んど休戰の狀態で、城兵は、無聊に苦むほどであつた。

夫々に、持場が極つて、自分が、受持の役を、すましてしまへば、大した用事もなく、寧ろ退屈する位である。或る兵士が退屈の餘りに、本丸の中に在る池で、釣りを仕て居ると、意外にも二尺餘りの鯉が三尾釣れた。さあ鯉が釣れた、といふので、其の喜こびは、一通りではない。早速に此の三尾の鯉を、司令官の手許へ、捧げることになつた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

兒玉は、例の通り、ニコ〳〵しながら、

『閣下、籠城中の魚釣りも、誠に暢氣なものですが、土百姓上りの兵士も、却々沈着いて居ります。此の籠城中の苦悶を、魚釣りに消さう、としたなどは、頗る面白いではありませぬか』

『ウム、頗る己も面白く考へて居る。併し兒玉』

『ハイ』

『此の鯉は、折角、釣つて來たのぢやから、空しくするのも、本意でなからう、と思ふ。長い間、籠城で苦んで居るのぢやから、切めて、幕僚の者だけにも、之れを頒けてやつたら、どうぢや』

『夫れは、寔によい思召、と考へます。早速、計らひませう』

『併し、兒玉參謀。頒けるといふても、纔に三尾の鯉、數多き幕僚に、何うして頒けるか』

『夫は又、然う云ふ物を調理する、專門の奴がありますから、夫に、工夫をさせませう』

『ウム、何うか、宜しく頒む』

幕僚付の兵士の中に、小川喜左衞門と、云ふ者があつて、之が、以前、料理番であつた所から、兒玉に、呼付けられた　喜左衞門は、早速其前へやつて來て、

『ハイ、何か、御用でございますか』

『ウム、汝は以前、料理番を、して居たのか』

『ハイ』

『夫ぢや、玆に、三尾の鯉があるから、之れを、幕僚一同の口に、充分入るやうな、料理法を考へろ』

『ハイ』

喜左衞門は、桶の中に在る、鯉を見て居たが、

『エ、之れは、鯉こくに致しますのが、一番宜らうか、と心得ます。然う致しますれば、御一同のお口に、入るだらう、と考へます』

『成程、そりや宜からう。早速に、其準備に掛れ』

『ハイ、承知致しました』

乃て、喜左衛門は、之から、鯉の料理に掛る。商賈人がやるのだから、忽ち出來上つた。併し、味噌も、自分の思ふやうなのはないし、羹汁を、取る事はできない樣な譯で、迚も、滿足な物にはならないが、鯉こくの印だけの物は出來た。ズーツと並んで食卓の上に、椀へ盛つて出す事になると、何う數へ違へたか、彌食ひに掛ると、椀が一個、不足して居る、兒玉は、早くも之れを見て、

『オイ、小川』

『ヘエ』

『椀が一個、足らんぞ』

『ヘエ、一個足りません、……どれオヤ〳〵成程、之れは、どういふ譯でしたらうかな』

『何ういふ譯ぢやない。汝能く注意せんけりや可かんよ。今一椀盛つて來なけりや可かん。己の分を那方へ廻したから、己の分を持つて來い』

『ハイ』

椀を取つた小川は、鍋を覗き乍ら、掻き廻しては、頻りに考へて居る。

『小川』

『ヘエ』

『ヘエぢやない。何うした、といふのだ』

『ヘエー』

『訝しな奴ぢやな。何うした、といふのに、ヘエといふことがあるか』

小川は、悄然と、兒玉參謀の前へ來て、姿勢を正しくして、

『寔に、恐れ入つた次第で、御座います』

『ウム、何うした、といふのか』

『寔に、中譯が御座いません。汁は御座いますが、鯉の肉は、既う一片も、御座いません』

『併し、最初に、人が何人居て、鯉を幾個に切る、といふ事は、定つて居つたのぢやらう』

『ヘエ、其れが、無いのでございます』

『其れぢや、最う一遍、椀を調べて見ろ』

『ヘエ』

小川が、恐る〳〵將校の背後から首を出して、覗いて見ると、大半、椀が空になつて居る。兒玉が、小川と懸合つて居る中に、既う食つて了つた者の方が多かつたのであるから、鯉の肉は、何所で何う間違つたか、到頭、一片、分らなくなつた。小川は、彌〳〵恐縮して、

『寔に、恐れ入つた次第で御座いますが、到頭、一片、足りないので御座います』

『然うか、何うも、足りない物は仕方がないが、金錢で購ふ事の、出來ん物ぢやからな。而も、已が、食ふ事が出來んのぢや、汁はあるか』

『ハイ』

『夫ぢや、代りを入れろ』

『代りと、申しますと』

『鯉の頭が、無なつたのぢやから、汝の頭を切つて、代りに入れろ。己が、斬つてやるワ』

小川は驚いて、

『と、と、飛んでもない話しで、どうか、夫だけは、御勘辨を願ひます』

最前から、見て居た一同は、ワツと聲を揚げて、笑ひ出した。兒玉も、思はず失笑て、

『アツハ、、、、、、汝の頭を斬るのだが、今日だけは、許してやる。之から氣を付けなけりや、可かんぞ』

『ど、ど、どうぜ、御勘辨を願ひます』

將校ですら、斯くの如き有樣であるから、以下の兵士の、食物に窮して居た有樣は、推測するに、餘りがあるではないか。

三

籠城が、長引いて來るので、苦勞もあるが、其の苦勞の中に、又樂みもある。忙しい役を引受けて居る者は、眼の廻るほど、忙しいが、別に、定つた役のないものは、休戰同樣な、有樣であるから、退屈をして困る、といふやうな事もあり、自然、さういふ暇な連中は、忙しい者の、氣を晴らすやうな事を考へて、種々、面白い事の工夫をする。暇のある連中から、參謀の所へ、願ひ出したのは、種々な、隱し藝のある者が、澤山に居るに依つて、どうか、寄席を許して貰ひたい、といふ事であつた。參謀の方でも、幾分か、兵士に慰安を、與へる事にもなり、自分達も、樂めるのであるから、之を許す、といふやうな譯で、籠城中の、命懸けの事をして居る中に、寄席が、臨時に出來るなどは、實に面白い事だ。兵隊の中の、器用な奴が、出て行つて、種々な藝を仕て、非番の者を樂ませる。藝をするもの自身も、自分の好きな道で、骨を折るのだから、自然、樂みになる、といふ譯であつた。

殊に、將校の妻君は、粹者の果が多いから、隱し藝ではなく、本藝を持て居る。豈夫に、高い所へ上つて、清元や、

常磐津を、唸る譯にも行かないが、蔭で、三味線を、彈いて聞かせる位な事は、屢々あつたのだ。

此時に流行た、籠城唄といふのがある。夫れは、維新の際に、大層行はれた『宮さん〳〵』といふ唄の、作り替であつて、聽く所に依れば、品川彌二郎が、作つたものともいふ。今、其の一二を擧げて見ると、

肥後の國々、四方八方、海山掛けて、ドン〳〵響くは、何ぢやいな。那は名高い、鹿兒島賊徒を、征伐するのぢや、知らないか　トコトンヤレ　トコトンヤレ

皆さん〳〵、壕の木蔭に、チラ〳〵見ゆるは、ありや何ぢや。那れは己が大切の、おみや（女房）の、彈丸除け天幕ぢや、知らないか。トコトンヤレ、トコトンヤレ

皆さん〳〵、向ふの畔道、チラ〳〵行くのは、ありや何ぢや。那れは賊徒が、段山打たれて、敗走するのぢや、知らないか。トコトンヤレ、トコトンヤレ

春の闇夜に、天主の上で、キラ〳〵光るは、何ぢやいな。那れは熊本籠城の、すさびに咲かせる、花火ぢや、知らないか。トコトンヤレ、トコトンヤレ

太鼓を敲き、三味に合はせて、節面白く、斯ういふ歌を唄つて、樂んで居たものである。元來、俗謠といふものは人の心を、非常に浮き立たして、夫が爲めに、元氣を付けるものである。日露の戰ひに、旅順の背面攻擊をした時分に、四國の某聯隊が、敵の堡壘に突貫するに當り、聯隊長が最先に、自ら劍を揮ひながら、四國で流行た『よしや節』を唄ひながら進んで、夫に勵まされて、一同も、今目の前、失うべき命を忘れて、節面白く唄ひながら、敵壘を、遂に陷れた、といふやうな事もあつた。現今、軍隊で、頻りに、軍歌なるものを謠ふが、之は卽ち、俗謠の稍上品なもので、歌位ゐ、人の元氣を、引立てるものはない。品川が、文官として、籠城中に、斯ういふ事に、斡旋をしたのは、猶且、豪い所があつたのだ。

京町口の薩軍が、屢〻、狙擊に由つて、城兵を斃すので、何うしても、討拂つて、了はねばならぬ、といふことに

なり、三月廿三日の、朝懸けの激戰で、遂々、薩軍の據つて居た、假設の堡壘を奪取した。それは可かつたが、この一戰で、藤崎少尉が討死した。その妻が、未だ十八歳で、如何にも子供らしい所があつた。こんなことを聞いたら、眼でも、廻しさうな、婦人であつたから、藤崎と同郷の、別役少佐（成義）が、非常に心配して、窃と、死體の取片付けにかゝつた。それを、藤崎の下女が見付けて、騒ぎ出したので、無據なく、之れを妻にも、打明けることになつた。所が、驚くかと思つた妻は、少しも驚かずに、却つて沈着いて居たので、隱し立てを仕た、別役の方が、却つて、面目が惡かつた、といふやうなこともあつた。

四

三月廿八日の夜、司令部にあつて、兒玉參謀は、頻りに、各方面の將校を集めて、何事か、相談して居た。所へ、

『鳥渡、申上げます』

兒玉は、徐かに回顧つて、

『何ぢや』

『エ、只今、段山口の前線へ、怪しい男が、一人參りまして、何か、上官に面會の上、申上げたい事がある、といふて居りましたので、前線の隊長から、其の旨を申して參りましたが、如何いたしませうか』

『そりや、何ういふ人物か』

『エ、其の點が、能く判りません。上官に拜謁を致さぬ内は、姓名も申述べられないと、申して居るさうで御座います』

『そりや、妙な奴が來たな。何ぢやらう』

兒玉は、暫時、考へて居たが、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.